

国際高校のゴミ問題

3年5組12番 迫 悠人
3年5組14番 新治 博人
3年4組13番 隅田 悠斗

keywords: 「ゴミ問題」 「国際高校内のゴミ事情 持続的な活動」 「プラチック問題」 「高校生にできること」

1.はじめに

私たちはスタディーツアーで石川県の海のゴミのポイ捨て問題について知った。海のゴミが街のゴミから流されている現状から、どのようにしてゴミを減らすことができるかを考えた結果、街のゴミを減らすためゴミをリサイクルしてもらいやすいような装置やゴミ箱などを作っていくこととした。

2. 序論

石川県の海では石川県と市長が協力しゴミ収集車332台分もの663トンのゴミを回収している。毎年、地域住民が道路などにポイ捨てしたゴミが、風や雨で飛ばされて河川に入り海や海岸に流れ着くのも重大な問題となっている。それに加えて、流されてきたプラスチックなどのゴミを魚がエサと思い誤食したり、海で遊ぶときに破片となって怪我をしたりするなどのゴミによる問題がある。実際、石川県の海にスタディーツアーで行った際、小学生もプラスチックゴミへの問題に取り組んでる姿を見た。そのような理由から、自分たちも何かできることがないかと思いプラスチックゴミ削減のための研究に取り組むこととした。そして、その中でも私たちのグループではリサイクルの徹底という解決策に取り組むこととした。はじめに私たちはプラスチックゴミのポイ捨てやゴミ箱を設置することによって引き起こされるゴミの放置問題や地域問題について調べた。「2019年、奈良公園で死亡した鹿の胃から、3.2kgものプラスチックゴミが見つかった」という報道を知った。野生動物でありながら市街地で共存する奈良では重大な問題であると考えた。そこで、身近な奈良公園でペットボトルのゴミやお弁当のゴミを捨ててもらいやすいようなゴミ箱を作って配置することを考えた。5年前から「ゴミは、あかん」のキャッチフレーズで啓発活動をおこなっている有志団体「奈良公園ゴミゼロプロジェクト実行委員会（以下：ゴミゼロプロジェクト）」の月イチ清掃（奈良公園ゴミゼロウォーク）が行われていて、試験運用として公園内にゴミ箱が設置された時期もあった。しかし、鹿がゴミを漁ったり、家庭ゴミを捨てたりする問題などが起きた。そして、奈良公園のゴミ箱全般が撤去された経緯があったため、奈良公園にゴミ箱を置くのはやめて国際高校内でリサイクル活動を実施していくことにした。私たちは、まずはじめにアルファベットゴミ箱作りを開始した。そして、ペットボトルであれば頭文字のpの形のゴミ箱を作り、ペットボトルキャップであればキャップの頭文字cの形で作ったゴミ箱を作った。

その次に国際高校内でのゴミ箱作りの必要性や、私たちのゴミ箱のバリエーション拡大のため国際高校内でゴミ箱作りを参考になるアンケートを実施した。アンケート内容として、リサイクルをする理由、自分自身がリサイクルを実施してるか、ポイ捨てをしてないか、どのゴミ箱がゴミを捨てやすいかなどを聞いた。このアンケートは3年生の全クラスに実施し、自身のゼミを除く4つのゼミ(76人)の結果をとった。アンケート結果から、オリジナルのゴミ箱を作成することとした。

3.本論

初めにアルファベットゴミ箱を作った。その結果、ゴミ箱の加工の過程で失敗に終わった。その理由は2つある。1つ目は木材を加工する場合、曲線を作ると割れてしまうこと、2つ目は木材の材料費が高いため何度もやり直しが効かない事だった。この失敗から加工しやすく安価なダンボールに材料を変えることにした。

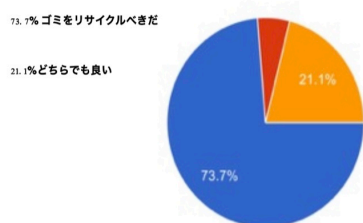
図1

図2



次に76人にアンケートを取り、7割強の国際高校の生徒がリサイクルをするべきと回答した。アンケート結果から、国際高校内でのゴミのリサイクル意識が高いことがわかった。

76件の回答



しかしアンケート結果とは裏腹に、(図3-6参照)国際高校内の3年生のペットボトルのリサイクル状況を調べたところ、下の図のようになった。そのことからリサイクル意識と実際の行動では相違があるとわかった。

	ラベル	キャップ	ラベル・キャップ無し	ラベルキャップ付き
1組	7本	12本	2本	6本
2組	5本	8本	2本	9本
3組	5本	11本	4本	2本
4組	0本	0本	0本	0本
5組	8本	10本	0本	0本

図3



図4



図5



図6



アルファベットゴミ箱の材料上の失敗と実際のリサイクル状況からダンボール製のゴミ箱の蓋を作ることにした。蓋にした理由は、ゴミを捨てる際、ゴミ箱を開ける手間が増えるため、蓋にリサイクル啓発のイラストを描くとリサイクルが促進されると考えたからである。

図7の蓋を国際高校の3年生の教室に設置して1ヶ月間、1週間毎にリサイクル状況を調べた。

図7



活動の結果、図8.9のゴミ箱内のラベルとキャップが分別されているように、クラス内でリサイクルが促進されたことがわかった。

	ラベル	キャップ	ラベル・キャップ無し	ラベル・キャップ付き
1組	0本	0本	28本	0本
2組	0本	0本	20本	0本
3組	0本	0本	26本	0本
4組	0本	0本	30本	0本
5組	0本	0本	33本	0本

図8

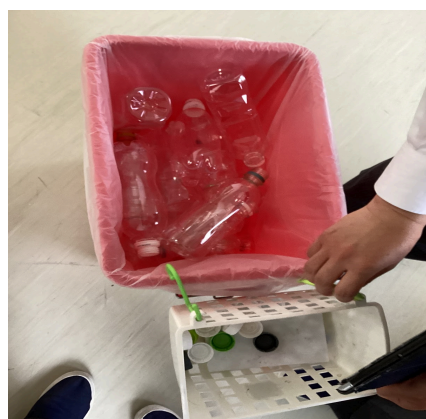


図9



4. 結論

私たちは分別を促進するゴミ箱の作成、ゴミの分別活動、分別を促進するためのゴミ箱の蓋の作成を行った。その結果、分別促進のためにはどのような行動を取れば良いかという問いに対して、視覚的忠告だけではなく分別に対する人々の意識の変化も促進させた方がリサイクル活動が促進されるという結論に至った。私たちは今後とも分別促進のための行動をとっていきたいと考えている。例えば分別を促進するためのゴミ箱の蓋の商品化を実現することである。また、将来的に音声による忠告も加えたゴミ箱を作成する予定だ。私たちはこの探究活動を通して行動力の向上を実感した。この経験は大学での探究活動にも役立つだろう。私たちはこれらの経験を活かし、リサイクルの重要性や具体的な方法を広く教育し、社会全体の意識を向上させて、リサイクル活動をさらに効果的かつ持続的なものにしていきたい。

5. 参考文献・出典

© KEIHANSHIN Lmagazine Co.,Ltd.

(参照2024-10月21日)サイト名Lmaga.jp更新日付2023

<https://www.lmaga.jp/news/2023/09/713894>